

森の調査の講義と実習

カブ森のめざす将来像のコンセプトの一つは「多様な生き物の住める森づくり」です。しかし現在行なわれている作業が「多様な生き物の住める森づくり」のためになっているかについて検証することは、とても大切ですが難しい作業でもあります。

また、森の管理作業は様々な価値観を持つメンバーの森の将来像に対する合意形成が不可欠です。それらの課題解決のためには、森の現状を客観的に示す調査が必要だと思われます。

そこで、今回市民活動のレベルで可能な調査（植生を中心に）の種類とその実践について学びたいと勉強会を企画しました。 <報告：世話役／森 順子>

【日時】 2001年11月10日（土）10時～16時

【講師】 朝廣和夫先生（九州芸術工科大学環境設計学科助手）

【内容】

1. 植生調査、測量実習の講義

- ・調査を行ってデータを蓄積していくということは、対外的に（行政など）、あるいは、会員同士の合意形成が取りやすくなる。また将来のメンバーのために過去の森の情報を残しておくために重要。
- ・会の活動の中で、こういった目的のために調査を行い、結果を整理し、形にするのか。そして、それをどう評価し、活動に反映させるのか。会に活かさない調査を無理に行うことは得策ではない。会の特色として楽しみを前面的に出すなら、調査を減らして作業を増やした方が良い。
- ・データは統一されたファイル（たとえばA4）に統一して蓄積していくと管理しやすい。

2. 植生調査、測量の実習 （アカマツ林にて）

①トラバース測量

ポケットコンパスという測量機器を使い、複数の基準点と計りたいものの角度を測り、その交点から位置を割り出すトラバース測量の実習を行ないました。

今回は、アカマツ林でアカマツの位置を記録し位置図



をつくる練習として行ないました。

木の位置が分かる地図があると、森の変化の様子が記録でき管理方法について話し合いをする際に便利です。

またトラバース測量はカブ森やアカマツ林の基本図（森の情報を書き込むためのベースマップ）づくりなどの作成にも活用できます。

② 植生調査

毎木調査は、アカマツ林やカブ森などで便利な調査方法。ブラウンブランケの植生調査は広い場所、新しい場所などで便利。

a) ブラウンブランケの植生調査

- ・被度（D）、群度（S）調査。

被度とは、ある面積中の地表面を覆う、植物の繁茂の程度を表します。

群度とは、植物の群れ（まとまり）の程度を表します。

ですから、大木が1本だけ枝を張って立っていたら、被度は高く、群度は低いことになります。

b) 階層構造調査

- ・高木層、亜高木層、低木層、草本層、コケ層の比率を調べる。

※目安として高木層：8m～ 亜高木層：2～8m

低木層：1～2m、 草本層：0.5～1m

c) 毎木調査

- ・各樹木1本1本の胸高直径（人の胸の高さにあたる、木の幹周りを測る）、樹冠幅（枝葉の広がり具合）、樹種を調べる。

3. 図面書き（製図）実習

ア) A3のケント紙にトラバース測量で調査した木を書きこむ（プロットする）。

イ) それに毎木調査で得た木の情報（種名、幹周り、樹冠幅）を書き入れて『平面図』を作成。

【感想】

調査や測量などの作業は地味で、几帳面さや根気のいる作業でした。また製図にあたっては、三角関数などの知識や作図の能力など、人によって向き不向きがある作業だと感じました。（私はウン十年ぶりに三角関数などに遭遇し、泣きそうでした）

朝廣先生が講義で「調査をしても資料がたまるばかりで、その結果を形にして活かすところまではなかなかいかない。調査は会や社会に還元されてはじめて意味がある」とおっしゃっていました。

調査の重要性が理解できたとしても、時間や、労力に限界のある森会の活動に組み込めるのかは、今後の課題のように感じ、会員皆さんの意見を伺いたいと思いました。

なお、第1回勉強会に引き続き講師をしていただきました朝廣先生には、森会の活動を十分に把握いただいた「オートクチュール」に匹敵する、「かゆいところに手の届くような」講義をしてくださいました。心より御礼申し上げます。